

春根などがいた。

このような朴氏家による社会活動の中で、特に注目すべきは彼らの言論活動である。1920年代に誕生した民族系新聞の配布網は社会の主要情報を収集して配信する主なルートとして、時には主要運動組織として機能する面をもっていた。朴準三らは言論活動を通して中央とのネットワークも形成していた。ところが、1930年代以後、一部の人物による親日的活動以外、目立った活動が見られなくなる。1930年代に入り、羅州地主の所有する土地の規模が平均30町歩以下に縮小した事情とも無縁ではなかったように思われる。朴氏家の場合も債務状況が悪化したことにより、1930年代に入ると大規模に土地を売り出した。

しかし、彼らの社会的ネットワークは解放以後も持続し、朝鮮戦争のように極端な理念が対立する過程においても犠牲者をほとんど出さなかった。彼らが韓末以来構築してきた社会的ネットワーク、植民地権力に対する妥協とともに見せた民族主義的な傾向によって地域民から「社会的人望」を獲得することに成功し、結果としてそれが理念の衝突を相対的に宥和させたのである。

結論

開港以後、社会的な変動が生じる中、地方の事情に通じた郷吏集団は、地主経営や商業活動を通じて蓄財した。伝統的な方法を用いて財をなす一方で、人民の抵抗にあって危機的な状況に置かれもした。しかし、彼らは農民戦争における守城、義兵活動によってこの危機を克服した。郷吏集団は内部に緊密なネットワークを形成し、地域民からも「人望」を勝ち得た。日帝下においても羅州頤老会のような組織を通して相互連携し、紐帯を維持しながら「地方有力者」になった。1920年代まで羅州の地主比率は全羅道平均より低いものに対して、小作地の比率は全羅道平均より高かった。これは羅州に大地主が多数存在していたことを示している。日帝下で活動した郷吏家門出身者も大地主であった。このような経済力をもとに社会活動を展開し、その過程を通して韓末に形成した社会的ネットワーク (social network) をさらに活用・強化した。

植民地権力と地域民の媒介者として植民地権力に妥協はしたが、市民大会、期成会などで地域民の要求を受け入れた。また、政治色の薄い教育運動には積極的に参加した。彼ら地方有力者は近代を受け入れる過程の中で中間者の役割を担っていた。身分的にも中間階級であった彼らは、士族勢力よりも近代を受け入れるのに比較的積極的であり、「儒教的教義の典範性」を守ろうとした士族³⁹よりは近代の受容において相対的に自由であり、植民地支配下においても妥協と拮抗の構造にも無理なく適応できたのである。

(原文：韓国語、日本語訳：金炳辰)

38 정근식 「한말・일제하 전남의 社會 경제——民族運動의 기반」(『전남사학』 9, 1995) 356頁。

39 前掲 『한말 일제하 나주지역의 사회변동연구』 2008の中、한영규의 論文參照。